

第6章 乗務開始

訓練が終り、帰国の途についた訓練生たちが、無事にロンドンに着いたとのテレックスが入った(当時は、まだインターネットが普及していなかった)。彼女たちは、翌日から3日間の休暇が与えられることになっていた。それぞれの故郷に帰り、ひとときを過ごしていた。アイルランド人は、なつかしのアイルランドにすっ飛んで帰っていった。4日後には、全員ロンドンに集まらなければならない。そこで、これから始まる1ヶ月のOJTフライト(機上訓練)に関して、ロンドン基地側のフリージングが予定されていた。

《悲報》

訓練部で、訓練報告書を作成していると、突然、ロンドン支店からテレックスが入ってきた。テレックスには、この前まで、元気に訓練を受けていた、アレックスが亡くなったと書いてある。詳細がよくわからないが、テレックスには交通事故に遭ったようだと言われていた。

アレックスは、クラスで一番年上のおだやかで、いつもニコニコしている娘だった。クラスのメンバーが、イライラしたときなど、なだめ役にまわり担任をよく助けてくれた。

又、テレックスが入ってきた。それによると、道路を横断中に、酒に酔った若者が運転する車にはねられたらしい。その日彼女は、結婚する女友達を祝うために、女性だけで集まるハンパティー(Hen-Party)に出かけた。その帰りの出来事だった。警察では、所持品に身元が分かる物がなく、彼女は一晚警察に安置され、翌日の新聞に事故の様子が報じられた。

〈昨夜若い女性が車にはねられ死亡した。身元が不明であるが、この女性の財布には日本のお金が入っていた〉

家では、アレックスがいつまでも帰宅しないので心配していた。次の日、母親が、財布に日本のお金が入っていたと書いてある記事を目にした。まさかと思い警察に問い合わせたところ、事故に遇ったのがアレックスだったことが判明したのだ。ひき逃げに遇ってしまい、だれにも見取られずに亡くなり、一晚中ひとりで警察に安置されていたのだ。

ロンドン支店の方で、葬儀参列について話し合った結果、会社代表として、ロンドン乗務員セクションのマネージャーが参列することになった。そして、クラスの代表として、東京訓練中、

寮で2ヶ月半同じ部屋だったカン・Rに行ってもらうことを決めた。ところが、カンは、一緒にの部屋で過ごした友人の死に強くショックを受けており、とても葬儀に参列するどころではないと泣きながら断ってきた。やむなく、代わりにクラスで一番しっかりしているティッシュに行ってもらうことになった。

葬儀に参列したティッシュによると、アレックスの母親にお悔やみの言葉をかけたところ、

「娘は、東京での訓練を終え、元気に帰ってきた。帰ってきた日には、家族に、日本のことや訓練のことなどいろいろ話してくれた。自分の希望がかなって東京に行き、思い存分有意義な日を送ってきたようだ。彼女が居なくなってさびしいが、彼女はよい思い出をもって神に召された」

と話していたという。アレックスの^{ひびき}の^{こゝろ}の上には、明後日からはじまるOJTフライトで着る予定だった真新しい制服と制帽が、きちんと乗せられてあった。



アレックスの死は、筆者自身も、クラスメイトにとっても、さうとう堪えた。しかし、まもなく始まるOJTフライトもおそろかにできない。ショックで、実機訓練がうまくはかどらないようなことになれば、彼女たちの評価を落とすことになる。一緒に乗務する邦人CAや旅客は、外国人CA訓練生が、交通事故に遇いクラスメイトがショックを受けていることなど知る由もない。仕事ができなければ、それなりの評価が下ってしまう。そちらの方も心配だった。

《OJTフライト初乗務》

しばらくすると、ロンドン基地を飛び立ってきた我が3期のメンバーが、日を追って順番に成田に到着しはじめた。邦人CAの場合は、地上訓練が終われば、訓練生は教官の手から離れ、あとは現場に任せる。しかし、大量のヨーロッパ人CAが、OJT乗務をするのは今回が初めてとなる。邦人CAと外国人CAがお互いうまくいくよう、コーディネートする海外基地担当セクション(通称Kグループ)が発足していたが、まだ

まだヨーロッパ人 CA たちの扱い方が分からない。そこで、彼女たちひとりひとりをよく知る担当が、成田乗員部に詰めることになった。

1 週間ぶりの再会だ。乗員部で待ち構えていると、フーニーと 4 期のキャロラインが、元気そうな顔をしてオフィスに入ってきた。

「Hello!! Kawaii-san, How are you?」

長時間の乗務とその間の緊張感で、まだ気持ちが高揚したままのようだ。

「初めてのフライト、どうだった?」

「今回は、初めてのフライトですと挨拶したら、チーフパーサーから、先輩の仕事をよく観察しているように言われました。先輩に付いて、ビジネスクラスのサービスを担当しました。ファーストクラスのサービスも見せてもらいました。機長が、離陸と着陸のとき、操縦室に招待してくれたので、離着陸のとき操縦室で何が行われているのかも分かりました。離着陸の風景もすばらしかったです」

ロンドンでの授業で、ジャンボ機を見学に行ったとき、機長席にちゃっかり座っていたのは、そういえばフーニーだったのを思い出す。

「フーニー、アレックスのことは本当に残念だった」

「私も聞いたときは、ショックで眠れませんでした。みんなもショックを受けています。アレックスの分もガンバリます」

「そうだ、アレックスのためにも、OJT を成功させような」

その後に着陸した何人かとも、アレックスのことを話した。もちろん、だれもがショックを受けている。しかし、それを乗り越え、機内では笑顔でサービスにあたってくれているようで、ひと安心した。

《髪を下ろすって》 Let one's hair down

何日か後に、スワンソン大学で心理学を専攻したペニーが到着した。一緒に乗務してきた邦人 CA たちが、帰着ブリーフィングで集まっている所に、お礼を言うために向かい出した。チーフパーサーが、
「初フライトの印象はどうだったか、皆に聞かせてください」と言っている。

そこで、ペニーは立ち上がり、10 数名いる先輩邦人 CA の前で、感想を述べはじめた。

「Thank you, everyone. You let your hair down

during the flight.」

と言っているのが聞こえてきた。そして、旅客があまり多いのでビックリしたとか、飛行中は緊張していたとか、話していた。

"You let your hair down"と言われて、邦人 CA たちはキョトンとしている。直訳すれば、「あなたはあなたの髪を下ろした」となる。それに対して、なぜペニーが「ありがとう」と言っているのか、だれも理解できなかったようだった。

実は、この表現は、彼女たちの間でよく使われる言い回しなのだ。欧米社会では、女性が髪を下ろすしぐさは、「親しみ」を表す身体表現(ボディランゲージ Body Language)なのだ。したがって、彼女は「みなさん、飛行中、親しくしてくれてありがとう」と言っていたのだ。

映画「タイタニック」でキャメロン監督は、ローズに髪を下ろさせるしぐさをさせることで、彼女がジャックに心を開いたことを表現しているシーンがあった。ジャックを部屋の招き入れる。ローズの許婚者キルグが部屋に入ってくるのではないかと落ちつかないジャックに、自分の肖像画を描く約束をさせる。ジャックにデッサンの用意をさせ、着替えのためにとなりの部屋に行く時、ローズがさりげなく髪を下ろしたのを、読者のみなさんは覚えているだろうか。

洋画のシーンで、このようなしぐさを見たことがある読者もいると思う。彼女もしくは彼の部屋に行き、2人でワインでも、ということになった。よい音楽とワインで、ムードが高まってくる。彼は、彼女を口説き始める。男性側は、言葉で女性を口説くことができるが、女性はそうはいかない。今夜はもっと彼と親しくなりたいと思っても、それをなかなか口に出せない。そのような時、彼女は、さりげなく、いままでアップにしていた髪をほどき下ろすしぐさをする。監督はさりげない演出で、彼女の気持ちを観客にも伝える。日本人同士では、この動作はあまり意識されていないが、欧米の男女の間では、それなりの意味を持った動作なのだ。だから、人前でやたらと髪を下ろすことはしない。つまり、この動作はリラックスしている、気を許している、という意味を持っている。

CA の世界では、ロングヘアーの人は、かならず髪をアップにし、まとめなければならないことになっている。大きな理由は、食品を扱っているためであるが、もうひとつは、髪を下ろしている姿は、旅客の目には、気がゆるんでいるように

見えるからなのだ。

《外国人が日本語を話すとき…》

外国人、特に欧米人が日本語を話すとき、日本人は「えっ」という顔をしたり、笑ったりする。そして、日本語で受け答えしてよいものか、英語で答えるべきか、迷っている姿を見かけることがある。相手が一生懸命、日本語を話そうとしているのに、わざわざ英語で答えている人もいる。英語を少しでも勉強したことのある人は、特にその傾向が強い。筆者もその1人だ。日本人の、外の人に対する思いやりの心がそうさせるのか。日本語は、むずかしい筈なのにそれを喋っているからビックリするのか…。そして、ビックリしていることを日本人は笑いで表現する。

ロンドン基地 CA たちが飛び始めた当時、訓練中に勉強した日本語を使って自己紹介をしたところ、「ワ、外人が日本語をしゃべっている」という雰囲気につつまれることになる。「日本人はどうして笑うのか」とよく聞かれた。笑われると、自分が使っている日本語が、間違っているのではないか不安になる。「間違っているのなら、指摘してくれればよいのに」とよく言われた。

一方、欧米人、特にアメリカ人は、日本人が英語をしゃべろうとすると、大抵の場合、“You speak English very well.”と先ずほめ、相手に自信をつけさせている。そして、自分はどんどん英語でしゃべりまくる。イギリス人たちも同じ傾向だ。

飛行機の中でも、スペイン人などは、私たち客室乗務員が、知っている限りのスペイン語で話しかけるだけでもとても喜ぶ。そして、その喜びを「ことば」で表現する。欧米人は、日本人に比べ、喜びをことばで表現するが、日本人は笑いで表現することがある。彼女たちにとって、この笑いがカルチャーショックとなった。

《Smile と Laugh》

日本語では、“Smile”も“Laugh”も、同じ言葉で表している。最近の日本では、Smile が少なくなり、Laugh が多くなってきている。いわゆる、声高の笑いが多い。そして、女性は、笑うときに口に手をあてる。それさえしない女性も

いる。昔の日本では、既婚の女性は「お歯黒」といって歯を黒く塗っていた。笑うと黒い歯が見えてしまうので、手をあてていたようだ。それが習慣となり、今でも、日本人は笑うとき口に手をあてる。これはどうも日本独自の習慣のようである。

欧米では、大人の女性、つまり Lady は、口に手をあてるほどの笑いをしない。口に手をあてて笑うのは品位に欠けることなのだ。ましてや日本の若い女性たちがよくやる、誰かの話にウケて、「言える、言える」と言いながら、膝を叩いてまでして大笑いをするなどほとんどない。我が訓練生たちも、訓練が辛くとも笑いを忘れなかったが、それはいつも Smile だった。

彼女たちは、痛みや悲しみに対しては、日本人がおどろくほど、痛がったり泣いたりする。一方、笑いの表現は、日本人に比べおとなしいことが分かった。

《逆カルチャーショック》

あるとき、ロンドン基地 CA と乗務員が一緒だった。サービスが一段落して、訓練時代の話になった。来日後、どのようなことがカルチャーショックだったのか聞いてみた。

異文化の中に 2、3 年もいると、その生活に慣れてしまい、その国の人たちと同じ感覚で行動するようになる。今では、ロンドン基地 CA たちも、日本人の行動スタイルに、違和感を覚えなくなっている。来日当初、感じたカルチャーショックにどのようなものがあったか、聞かれても思いだすのに苦労するらしい。もはや逆カルチャーショック状態なのだ。

欧米人は、レストランで、ウェイトレスが食事を運んでくれたとき、相手の目を見て「サンキュー」という。お礼を言うときは、かならず相手の目を見るのがマナーとなっている。日本では、「ありがとう」という代わりに頭を下げることが多い。したがって、相手の目を見ない。

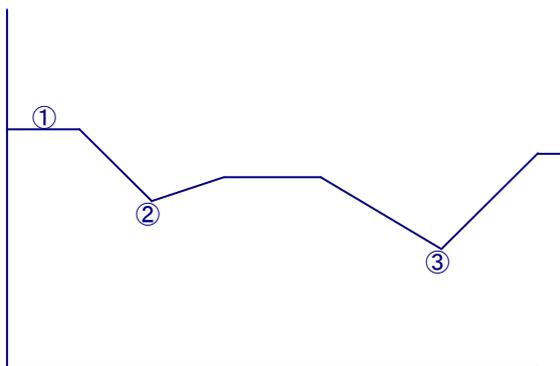
彼女たちもいつの間にか、「サンキュー」と言う代わりに、頭を下げている。機内は、大半が日本人旅客で占められている。ロンドン基地 CA たちも、いやおうなく日本人旅客を相手にサービスすることになる。仲間の CA たちも日本人である。日本人は、頭を下げる動作をよくする。何かにつけて、うなずいたりお辞儀をしたり、頭を上下に振る動作が多い。相手の話を聞いている時でさえそうだ。また、日本人の旅客に飲物か何かを注文され、持っていくと頭を下げられる。

そのような環境の中にいると、日本で買い物や食事をするときは、いつの間にか、自分も頭を下げてしまっている。

自国に戻り、友達やホーイフレッドとレストランに行く。メニューを見て、ウェイトレスにオーダーする時、「私には～をください」と言いながら首を上下に振っているらしい。横にいる友達に、「みっともないから、首を上下に振るのはよしなさい」とたしなめられる。すっかり日本的になっている自分がおかしくてしょうがない。自宅で電話しているときも、「あなた、お辞儀スタイルになっているわよ」と家族に言われるらしい。「サンキュー」などと言っている時、電話口で、いつの間にか頭を下げている。日本の寮生活で履き慣れたスリッパも、今や離せないものになっている。「スリッパでいると気持ちがいいの」と話していた。

《カルチャーショック論》

人が異文化に接すると、下のような W カブに似た反応が起こる、と言われている。



はじめて海外旅行したり、その国に住んだりすると、今までの生活とがらりと変わり、最初のうちは、見るもの、聞くものすべてが素晴らしく感じる。この時期をハネムーン期間 (Honeymoon Period) ①と呼ぶ。

そこに住み、いろいろなことが新鮮に感じる時期が過ぎると、少しずつ生活面での違いが分かってくる。今まで自分が育ってきたやり方をすると、何かまわりから浮いてしまったりする。ロンドン基地 CA にとって、地震はいままで味わったことのない、天地がひっくり返ったようなカルチャーショックだった。また、日本に来た外国人の多くは、日本のタクシーに乗ろうとすると、ドアが自動的に開くので、初めはビックリするそうだ。このようなことが、日常生活でいろいろ起きてくる。そのため 24 時間緊張状態にさらされるようになる。ロンドン基地 CA も、いまま

で自分が過ごしてきたものと違う、日本の衣食住や企業生活に、自分はやっていけるのだろうかと不安になり、第 1 回目のカルチャーショック②に見舞われることになる。

そのうちに、仕事で現地の人と接したり、地域の人たちと友達になったりして、その国の生活習慣等が分かるようになり、再び適応度が高まってくる。ところが、2 回目のカルチャーショック③で、一番落ち込む状態になる。

この 2 回目のカルチャーショックの原因は、基本的な価値観の違いが分かってきて、生活や仕事をしていく面で、本当のむずかしさを感じるようになった時に起きる。欧米と日本とでは、狩猟(契約)社会と農耕(村)社会の価値観の違い、キリスト教的価値観と仏教・儒教的価値観の違い、地理的自然環境からくる価値観の違いなどが背景にある。ものごとを論理的に考える習慣を身につけて育った欧米人が、日本社会で感じるのは、論理が通じない点である。反対に、日本人が欧米社会に入って感じるのは、あまりにも論理的に押しつけてくるので疲れる点なのだ。

外国人も、この 2 回目のカルチャーショックを乗り越え、日本にいる限り、例えば、謙虚(Humble)に振る舞うことが必要なのだ、と考えるようになると、再び、異文化に対する適応度が高まる。それ以降は、小さなカルチャーショックに出会うことはあるが、その社会とうまく適応していけるそうだ。いまでは、2 回目のカルチャーショックを乗り越えたロンドン基地 CA たちが多数乗務をしている。

そして、おもしろいことに、異文化にすっかり慣れてしまい、その文化に心地よさを感じてしまった人が帰国すると、自国文化に逆カルチャーショックを感じてしまうそうだ。自国の友達から「お前なんか変だゾ!」と言われたりするのは、前述のとおりだ。

《ボム雑誌で税関トラブル》

日本でも、ヘアが解禁になり、ヘアヌード写真が一般の人の目にも触れるようになった。当時はまだ、アメリカで発売されていた「プレイボーイ」や「ペントハウス」といった雑誌は、日本に持ち込むことができなかった。持ち込もうとすると、税関検査で没収され、へたをすると処罰された。

ある時、訓練部に、香港基地 CA がボム雑誌持込み容疑で、税関トラブルになっていると報告が入った。その CA は、香港にいるホーイフレッドに頼まれて、「プレイボーイ」を買ってき

たらしい。彼女はロスアンゼルスから日本に到着し、翌日、別の便を乗務し香港に帰ることになっていた。彼女としては、その雑誌を香港に持って帰る予定だった。ところが、たとえ香港に持って行くのであろうと、一旦日本に持込むことになる。日本国内に持ちこめば許されるはずはなく、税関で取り調べを受けるハメになった。彼女は乗務にあたり、入国先の規則について、訓練部で習ったことを、メモにして持っているほど真面目な CA だった。取り調べ中、彼女はメモを税関係官に見せ、訓練部で習ったことを説明した。実は、訓練部では、外国人 CA に、ヘアヌード写真を含むポルノ雑誌の日本持込み禁止について教えておらず、テキストにも記載されていなかった。

邦人 CA たちは、日本の法律で育ってきているので、日本ではポルノ雑誌の持込みが禁止されていることを、常識として知っている。そのため、教官の雑談の中では話すことがあっても、テキストには記載していない。外国人 CA 訓練で使う英語版テキストは、元はと言えば、邦人 CA 用のテキストを英語に訳しものだった。教官たちも、外国人 CA も、ポルノ禁止のことについては、香港でも同じであり、訓練生は当然知っているだろう、と考えて、敢えてそのことについて触れていなかった。

一方、その香港基地 CA は、自分の国の法律にそって行動していたのだ。香港では、イギリスと同じように、当時すでに、ヘアヌード入りの写真が解禁になっていたのだ。彼女は日本も香港と同じだと思い、ホーイフレントに頼まれるままに米国版「プレイボーイ」を日本に持ち込んだのだ。税関の係官も、彼女がしっかりと仕事のためのメモを持っており、理由が判明したので「プレイボーイ」の没収だけで、彼女を放免してくれた。その後、訓練部では、外国と日本の法律の違いについてもテキスト記載内容に注意を払うようになった。

《サンキュー》

「日本の男性は、どうして“サンキュー”と言わないのですか。

私たちは“サンキュー”を、日本語で“ありがとう”だということは知っています」

とロンドン基地 CA から質問を受けた。

機内で、いろいろな国の旅客に出会う。サービスの受け方も違う。邦人 CA たちは、欧米人旅客はサービスの受け方がうまく、サービスする側をも、よい気分にしてもらえることが多い

と言う。筆者も同じ感想を持っている。欧米人旅客は、サービスする側の人格を認めた上でサービスを受けてくれる。そして、何かしてあげると、「サンキュー」が必ず返ってくる。そして、「サンキュー」と言いながら、目でも「感謝の気持ち」を伝える。いわゆる「アイコンタクト」がある。

一方、日本人旅客はどうだろうか。「ありがとう」と言ってくれるのは、どちらかというと、女性の方が多い。女性の中でも、お年寄りのマナーに感動することがある。CA たちが忙しそうなので、のどが乾いても我慢していることが多く、注文するときも遠慮がちにする。飲物を持っていくと、必ず「ありがとう」と言ってくれる。一番すばらしい光景は、飛行機を降りるとき、ドアのところ一旦立ち止まり、客室乗務員に丁寧なお辞儀をして行かれるときである。

次に、若い女性たちがすばらしい。なぜかという、若い女性たちは声がよく出ている。学生時代にファーストフードなどでアルバイトしている人が多いからかもしれない。「ありがとうございます」と言うことに抵抗感がないようだ。とにかく元気だ。機内で接しているかぎり、「ありがとう」のひと言が一番少ないのは、中堅ビジネスマンかもしれない。街中の喫茶店での注文のやりとりを想像すると分かる。

店員「ご注文は何になさいますか」

お客「コーヒ……」

そして、

店員「お待たせいたしました」

お客「……」(僅かばかりうなづく)

よく見かける光景だ。機内でも同じような場面に出会う。単語しか言わないで注文する人がけっこう多い。もちろん中には、サービスする側として見習わなければと思う方も多くいる。ファーストクラスを長年担当してきて、すばらしい方々にお会いすることができた。一流企業や財界のトップの方には、さすがにトップになる人は違う、と感激することが何度もあった。物腰の柔らかさ、心遣いの一言が、サービスする側の人達を勇気づけてくれる。そして、決して偉ぶらない。

《殿様文化》

日本では、サービス業は、「土農工商」でいえば「商」にあたる。ビジネスマンは「企業戦士」と呼ばれ、昔でいえば「サムライ」であり「士」の地位にあった。武士が目指したのは殿様である。殿様は、側近が食事を運んできて「ウム」というだけ

だった。沽券にかかわるので、決して「ありがとう」とは言わない。せいぜい言っても、「ご苦労」くらいであろう。一方、商人たちは「いらっしゃいませ」と「毎度ありがとうございます」で商売をしてきた。ときには、「もみ手」をすることもあった。その風習がいまだに残っている。

日本人は、感情をあまり表に出さないよう教育されてきている。国際化の時代に入り、異文化の人を接する機会も多くなっている。気持ちは表現されてはじめて相手に伝わることを、忘れないで欲しい。

《Must と Should》

彼女たちは、邦人 CA の中で乗務をする。当時、イギリス人の先輩 CA はいなかった。機内で、ロンドン基地 CA にいろいろ教えるのは邦人 CA たちだった。

「これは、こうするのよ」

というようなことを英語で伝えるのだが、その英語が日本人英語のため、聞いているロンドン基地 CA にとって、

「そんな言い方しなくたっていいじゃないの」

と感情的になったことがたびたびあった。邦人 CA は、「こうするのよ」を英語で、

“You should do like this.”

とか

“You must do it.”

というように、“should”と“must”を使ってしまう。日本人同士なら、“should”や“must”を使っても、日本語に訳せば、それほど強い意味にならない。ところが、この2つの単語は、英語国の人達の間では、かなり強い意味合いを持って使われている。

「なんで、そんなやり方しているの、こうしなくちゃダメじゃないの」

のニュアンスがある。場合によっては「あんた、バカじゃないの」くらいの意味合いになることもある。同じ英語でも、日本人と英語国の人たちでは、意味の受け取り方が違って、それが、お互いの感情のすれ違いを起こす原因となった。

どうしても“Should”や“Must”を使いたいのであれば、その前の人称を“We”にするとよいのだ。

“We should do this.”

とすれば、相手だけではなく、自分もそうするのだということを表示でき、相手を非難している意味合いがなくなる。で

きれば、

“We are supposed to do this.”

のように、“Be supposed to”を使えば、「こうすることになっているのよ」となり、相手も素直に受け入れてくれる。

《キャレーヘルプ無用》

ある日、到着便のドイツ人 CA が興奮して、コーディネーターセクション(外国人担当セクション)のオフィスに飛び込んできた。邦人 CA のことで、だいぶ頭にきているらしい。

「邦人 CA に侮辱された」

と言っている。気持ちを落ちつかせて、何があったのか聞いた。

くだんのドイツ人 CA は、その便では最後部キャレー(Galley)担当だった。日本人同士ならよくやることだが、そのときの客室担当の邦人 CA は、彼女が、キャレーで大変そうな様子だったので手伝った。ところが、そのドイツ人 CA はすごい剣幕で怒りだしたのだ。善意で手伝った方も、「せっかく手伝ってやったのに」と気持ちが収まらない。売り言葉に買い言葉でなってしまった。

「なんで手伝うのよ。」

私を半人前に扱うとは失礼よ!

「失礼なのはどちらよ。」

ありがとうくらい言ったらどうなの!」

「勝手に手伝っておいて、

“ありがとう”を言えていいの!」

「だいたいあなたがモタモタしているから

いけないのよ!」

エコミークラスを統括しているパーサーが仲裁に入り、お互いの誤解を解くよう努めたが、中々収まらない。最後には、客室責任者であるチーフパーサーが、いざこざは後にしろ、と指示を出し、その場を収めた。

そして、東京に着くやいなや、冒頭のように、頭に来ているドイツ人 CA がコーディネーターセクションの部屋に入ってきて、「日本人は失礼だ」と興奮している。そこに、一方の邦人 CA も入ってきて、「今回の外国人 CA は、日本人のやり方を理解しようとしなさい」と言っている。

コーディネーターセクションでは、はじめに、個別に話を聞くことにした。双方から、問題点はどこにあるのか話させた。

外国人側「他人の仕事を勝手に手伝うのはその人をバカ

にすることになる」

日本人側「他人が大変そうな時は、手伝うのが当たり前」
問題点がハッキリしたので、興奮が落ちついてきたところで、2人を引き合わせ、もう一度話しをさせた。習慣と価値観の違いから起きた問題なので、それぞれ相手の価値観を知ることが一番の近道なのだ。異文化は、どちらが正しくてどちらが間違っている、というものではない。お互いの違いを理解し、受け入れることが大切なのだ。この2人も、最初は感情的になっていたが、しまいには、「そうだったのか」ということになりハッピー・エンドとなった。

《議論か言い合いか》

日本人は、議論が得意な民族である。「和」を大切にするため、できるだけ議論や口論を避けようとする。自分の意見を押し通そうとすれば、「あいつは自己主張が強い」というレッテルを貼られる。また、角が立ってしまう。

欧米社会では、反対に自分の意見を持たない者や、それを相手に伝えることができない者は、ダメな人と見なされる。授業中も、折りにつけて、彼女たちは自分の考えを述べていたし、時に、議論になることもあった。

欧米社会では、「Chat 雑談」-「Talk お話」-「Discussion 論議」-「Debate 討論」-「Argue 議論」-「Quarrel 口論」のように、相手との話し合いには序列がある。

ところが、ヨーロッパ人 CA の方は論議しているつもりで、自分の意見を述べている。それを聞いている邦人 CA の方は、相手が主張している内容より、相手の言い方や態度の方に目が言ってしまう。そして、この外国人は生意気だ、と感情的になってしまう。相手が感情的になれば、ヨーロッパ人 CA の方も感情的になりケンカになる。

日本には、「Discuss」や「Debate」そして「Argue」という発想は希薄である。相手と議論するより、摩擦を起こさない方に重点が置かれている。日本では、上司に対し、何か主張したいときは、「僭越ですが…」とか、「生意気なようですが…」とか、「お言葉ですが…」という接頭語をつけなければならない。日本では、自己主張はあまり歓迎されないのが現実だ。

《顔をつぶされた》

香港基地のベテラン中国人 CA が、浮かぬ顔をして、コーディネーターセクションのオフィスに入ってきた。筆者が、よく知っている CA だったので、気になり、声をかけた。彼女は、一緒に乗務した4人の香港基地 CA の中では、リーダーであり、後輩の指導をする立場にいた。ところが、邦人 CA たちは、彼女がリーダーだということを知らなかった。彼女が後輩の香港基地 CA にいろいろ指導してきたことを、否定するような発言をしてしまった。それも、後輩がいる前で、「そんなことしなくてもいいのよ」的なことを言われ、すっかりムツをつぶされた。彼女は、長い間、邦人 CA と仕事し、学んできたことを後輩に指導したのだが、そのとき一緒に乗務をした邦人 CA たちは、違うやり方をしていた。頭から彼女のやり方を否定してしまったのだ。

外国人 CA の歴史が長くなってきた現在、どの基地でも、ベテラン CA たちに、後輩を指導する役割を与えている。教え子の何人かは、基地のマネジャーの片腕となり、スーパーパイザーとして、後輩の指導・管理をしている者もいる。その彼女たちも、乗務する時は、時には、自分より後輩だけど、客室責任者になっている邦人 CA のもとで、一乗務員として仕事をするようになる。邦人 CA たちも、そこらへんの事情を理解するようになり、いまでは外国人ベテラン CA の顔を立てながら、一緒に働いている。

《日本人はトイレが近い》

欧米生活が長い犬養道子さんによると(『日本人が外に出るとき』犬養道子著 中公文庫)、海外で日本人が集まる催しものがあると、主催者側は、トイレをいつもより多く用意するそう。それほど、日本人はトイレが近い民族なのだ。「日本人のお客様は、食事のあと、すぐにトイレに行く人が多いです!」

これも彼女たちの感想である。食事サービスが終わったとたんに、トイレに立つのはきまって日本人旅客なのだ。欧米人は、日本人ほど頻りにトイレに立たない。

《それはプライベートです》

ロンドン基地 CA たちが、乗務を開始してしばらくたってから、教え子のフィオナが困惑したような顔をしてオフィスに入ってきた。

「日本人 CA と話すと、必ず”結婚しているの”とか”ホーイフレンドはいるの”とか、プライバシー(Personal matter) のことを聞かれます。私たちは他人のプライバシーについてあまり質問しません」

日本では、自分のことをあまり他人に話さないのが一般的なのだ。話すことによって、相手に余計な心遣いをさせないようにしている。たとえば、ある人が、「自分の子供はいま病気のな」と話せば、聞いている人は、子供が病気なら何かお見舞いをしなくてはと考える。お見舞いに何を贈ればよいのか。金額はいくらぐらいの物を贈ればよいのか。いろいろ思案することになる。そのため、自分のことを話して相手に心配させるより、相手のことを聞いた方が相手に心配をかけない、というのが日本人の考え方なんだ。だから相手のことを聞くことに重点をおいている。相手のことを聞くことは、また、相手に関心があることを伝えることにもなる。

日本では、プライバシーと思われることでも、相手のことを聞くのが礼儀と考えているフシがある。一方、自分のことを知ってもらうことを基本としている欧米人は、相手のことを聞くより、自分のことを話す。筆者が担当した訓練生も、こちらから話すまでは、プライバシーに関する質問は一切してこなかった。それより、自分のことを話す。「自分の家族」や「出身地」や「将来の夢」とかを話していた。

一方、邦人 CA は、「教官は、お子さんは何人ですか」とか、「いつ結婚したのですか」とか、「奥様は元 CA ですか」と聞いてくる。

私たちは、話すネタがなくなると、仲間の噂をして会話をつなごうとすることがある。他人の噂話をしたり、相手のプライバシーについて質問したりする。しかし、噂話やプライバシーの話は、他人を傷つけたりすることがある。

自分のことを話しているかぎり、だれにも迷惑はかからない。特に、親しい間柄でないときは、簡単に相手のプライバシーを聞かない。相手のプライバシーについて関心があるなら、なおさら自分のプライバシーを先に話すとよい。「自分のプライバシーを話してもいないのに、相手のプライバシーを聞くのはマナー違反よ」というのが、邦人 CA に対する彼女たちの最初の印象だった。もしプライバシーに関わることを聞きたければ、「May I ask you?」という断りを入れるのがマナーとなっている。

《写真を持つ》

欧米人は、財布や手帳の中に、家族や恋人の写真を入れ持ち歩いている。欧米人はちょっとした会話の時に、この写真を活用する。

クラスのイギリス人たちも、家族や恋人やペットの写真を持っていた。お互い見せ合っていた。筆者も折にふれて見せてもらった。

会話の根底にあるのは、自分のことを知ってもらうことである。自分自身だけでなく、写真を見せることによって家族までも紹介する。時には、飼っているペットの写真などのときもある。若い人は、家族だけではなく恋人の写真も入れている。

「これは、ジョージと旅行に行った時の写真なの」

「ポールは今アメリカにいるの」

とか言いながら見せる。そうすると、相手が、

「彼ってすてきじゃない。あなた幸せそうね」

「今度のパーティーにジョージを連れて来ない?」

などとやっている。パーティーで会っても、彼のことはいろいろ聞いているし、すでに写真で見ているので、前から知っている友達のように、すぐに打ち解けてしまう。大人同士の会話でも、写真を見せながら、「自分の妻はすばらしい」とか、「息子は自慢の子だ」とか、「娘は性格がよくて魅力的な子」などと紹介する。

このようなことは、日本人は苦手である。日本人は、仕事場に家庭を持ち込まないし、家族のことについて、やたらと話さないのが社会習慣になっている。ましてや、家族の自慢話をすれば嫌われる。

家族や恋人のことを話しているかぎり、会話もスムーズにいくし、だれも傷つけないですむ。そこで活躍するのが写真なのだ。これも欧米人の生活の知恵となっている。

《上陸許可証》

外国人 CA が、乗務で日本に滞在する時は、日本での行動範囲は決められている。好き勝手に京都や北海道に行くことはできない。観光でなく、乗務で日本に来ているので、滞在する場所や地域は限定されている。彼女たちが成田に到着した時は、千葉、東京を中心とした地域が、許されている行動範囲となっている。そして、街に出るときは、身分を証明するために、パスポートの所持が義務づけられてい

る。邦人 CA たちが海外に滞在している時と同じだ。2、3泊あるからといって、遠出は許されていない。外出時には、パスポートを常に持っていなければならないが、海外はスリが多いこともあり、パスポートはホテルに預けて、会社の身分証明書のみを所持して外出することもある。

日本政府は、外国人乗務員に対して、入国時に上陸許可証を記入させる。それに入国管理官がスタンプを押すことにより入国を許可する制度になっている。また、外国人乗務員たちは、スタンプが押された上陸許可証を、パスポートとともに常に所持していることも義務づけられている。また、日本を出るときは、上陸許可証を出国管理事務所に戻却しなければならない。この制度によって、日本の出入国管理事務所は、外国人乗務員の日本の出入りをしっかり管理している。

《私、体調悪いの》

訓練中に、教官を悩ませたことの一つに、病気のことがあった。熱を出して訓練を休んだり、お腹が痛くなって救急車で病院に運んだりした。

飛びはじめてからも、機内で、“I'm sick”と言いながら、チーフパーサーのところにくる者がいた。邦人 CA が、「調子が悪い」と言ってきた場合、同じ日本人なので、どの程度の調子の悪さか見当がつく。横になって休ませた方がよいか、少し座席に座っていれば治るのか判断できる。

ところが、ロンドン基地 CA に、「I'm sick」と言われると、どの程度の悪さなのかよく分からない。そこでむげにもできないので、「とにかく乗務員用席で休んでいなさい」と言って休ませることになる。そして、くだんのロンドン基地 CA は、チーフパーサーのお墨付きをもらったので、休むことになる。

ここでまた、文化の違いから摩擦が起きる。日本の社会では、仕事に調子が悪くなって医務室に行ったり、休憩室で休んだりするときは、まわりの人達に対して、仕事に抜けて申し訳ない、という態度をとる。また、少し休んで気分がよくなった時は、「ご迷惑をおかけしました」の一言をいう。もちろん、日本でも、周囲の人たちは、体調が悪くなった人に気をつかうが、体調が悪くなって仕事に穴をあけた方も気をつかう。

彼女たちの場合、周囲の人の方が、より気をつかい、「あなた、だいじょうぶ。なにかできることはないの」と声をかけ

ている。調子が悪くなった方は、「体調が悪いのだから仕方がないのよ」という顔をしている。

この違いは、少し休んで気分がよくなり、仕事に戻ったときに出る。邦人 CA なら、「どうもすみませんでした」と言いながら仕事につくが、ロンドン基地 CA からは、その一言がほとんど聞かれない。邦人 CA たちは、「いない間、あなたの分までカバーしていたのよ」という気持ちがある。ところが「すみませんでした」の一言がないのでカチンとくる。

一方、ロンドン基地 CA の方は、「私は調子が悪いのに、やさしい一言をだれもかけてくれないの」と、これもまたカチンときている。

《III と Sick》

ロンドン基地 CA たちは、気分が悪いときは、“I'm sick”ということが多い。しかし、この言葉を聞くと、チーフパーサーは、「この娘は病気なのだ」と思ってしまう。日本人は、学校で「Sick=病気」と習ってきている。日本で教えているのはほとんどが米語なのだ。米語では、たしかに「Sick=病気」でよい。だが、イギリスでは「Ill=病気」であり、「Sick=気分が悪い、吐き気がする」という意味となる。空酔いのことは Airsick というし、船酔いは Seasick である。これらの言葉から判るように、もともと、Sick は病気そのものよりも、気分が悪くて吐きそうな状態を表した言葉なのだ。新人 CA なら、病気というより、よくある空酔いで Sick の状態も考えられる。

したがって、イギリス人は、風邪を引いて熱が出ている時は、病気の状態なので Ill を使っている。

この2つの言葉の違いが判れば、イギリス人 CA たちに、「I'm sick」と言われても、すこしも恐れることはなくなる。Sick であれば、少しの間休ませて様子をみればよい。Ill であれば、熱があつたり、痛みが伴っているかもしれないので、症状を聞き、薬を飲むよう言ったり、横になって休むよう指示できる。休ませるにしても、どの程度の時間休ませればよいか、判断もできるようになる。

《え、食中毒!》

Food poison も、日本人が理解している意味と、ロンドン基地 CA が使う時の意味に、少しずれがある。お腹が痛くなった時、ロンドン基地 CA たちは、この言葉をよく使った。

訓練中、初めてこれを言われた時、「うわっ、食中毒が発生!」と少しあわてたのを思い出す。その後も、「Food poison で腹痛がするので、授業を休みます」と言ってきた訓練生が何人かいた。日本人の感覚では、「Food poison = 食中毒」なのだ。

「Food poisoning って、熱は、嘔吐は、下痢は?」

「熱も嘔吐もアリヤセン。お腹が痛イタケス」

「Food poisoning なら、熱や嘔吐があるだろ」

「イエ、アリヤセン」

「それじゃ、ただの腹痛ではないか」

「ハイ、Food poisoning デス」

日本語には、「食べ合わせが悪い」という言葉がある。食べ合わせが悪ければ、後で、お腹が痛くなったりする。また、冷たいものを飲みすぎたときにも、お腹が痛くなることもある。食中毒は、サルモネラ菌など、細菌性のバクテリアを食物と一緒に摂取すると、具合が悪くなり、症状はひどくなる。Food poisoning と言っている CA の話を聞いても、どうも食中毒の症状ではない。彼女たちが、この言葉を使うときは、本当に食中毒の場合もあるが、たいていは、食べ合わせが悪かったり、冷たいものを飲みすぎたりしたため、お腹が痛くなっている。そう考えても、間違いないことの方が多かったのを覚えている。

“Food poisoning”は、「食べ合わせが悪くおなかをこわしている」の意味もあることが分かった。

《ネームバッヂ》

外国人 CA 訓練が始まってまもなくの頃、ドイツ人 CA から、名前を呼ぶときは、Family Name(姓)で呼んで欲しいと要求があった。それ以降、ドイツ人 CA を呼ぶときは、「姓」で呼んでいる。今も、ドイツ人を呼ぶときは“Family Name”で、イギリス人やブラジル人を呼ぶときは“First Name”で呼ぶよう使い分けている。シンガポール人や香港中国人 CA を呼ぶときは「シンさん」「ホーさん」と「姓」で呼んでいる。

CA たちは、制服の胸ポケットあたりに、ネームバッヂをつけている。このネームバッヂに、「姓」を入れるのか「名」を入れるのかで一悶着おきた。

邦人 CA の場合は、漢字で「姓」が書いてあり、その下にローマ字が入っている。その昔は、「姓と名」共、入れていた

のだ。姓名が分かると、お客さんの中には、住所を調べたりして、直接 CA の自宅に電話をかけてくる人がいたため、「姓」だけにすることになった背景がある。

外国人 CA のネームバッヂは、どちらにするか検討した結果、ドイツ人は「姓」、イギリス人とブラジル人は「姓・名」とも、中国系の人達は「姓」とすることにした。ところがイギリス人 CA の方から、「姓」だけにして欲しいと言ってきた。話を聞くと、「機内で、お客さんに First Name で呼ばれるので嫌なんです」

「君たちは、お互い First Name で呼び合っているじゃないか」

「友達同士ではそうですが、知らない人に First Name で呼ばれるのは嫌です」

彼女たちが所属するロンドン基地からも強い要請がきた。外国人 CA も邦人 CA と同じように、ネームバッヂには、「姓」だけを入れる方向に固まりつつあった。今度は、ブラジル人 CA から、「ブラジルでは、お互い姓で呼ぶことはほとんどないので、姓だけにしてしまうと、誰のことかさっぱり分からなくなってしまふ。絶対反対である」と言ってきた。ブラジル基地に問い合わせると、ブラジル人 CA たちが言っているとおりとの答えが返ってきた。筆者も、ブラジル人 CA の訓練を担当したことがあるが、そういえば、彼女たちの First Name は、今でも覚えている。ところが、Family Name はすぐに出てこない。それほど First Name に慣れ親しんでいた。

それぞれの基地の事情もあるが、最終的には、ブラジル基地に泣いてもらうことにし、どの基地の CA もすべて、「姓」だけのネームバッヂで統一することにした。

《外国人 CA 採用の歴史》

国際線が主流だった日本航空の外国人 CA 採用の歴史は古く、1966年に始まっている。最初に採用されたのが香港中国人 CA たちだった。当時、香港はまだ英連邦の一員であり、香港から東京経由で、カナダやアメリカへの移民が多く搭乗していた。移民の人たちは英語が通じないことが多かった。そこで、通訳兼機内サービス要員としてバンクーバー便やサンフランシスコ便に乗務していた。

1969年には、韓国線通訳要員として韓国人 CA が数名採用されたが、すぐに廃止になった。

1982年に、JAL系列の日本アジア航空が台湾路線に台湾人CAを投入している。その後、日本航空に統合されたため、現在はJAL CAとして乗務している。

1985年には、ブラジル・リオデジャネイロ//サンパウロ便の開設があった。旅客の多くは、里帰りする日系ブラジル人やブラジル生まれの日系人だった。ブラジルはポルトガル語の国で、やはり英語が通じない。そこでブラジル人CAを採用することにした。

1988年に、初めてヨーロッパ人CAの採用を行なった。ロンドン基地70名、フランクフルト基地40名が採用された。併せて、シンガポール基地70名も採用された。その後、上海基地も開設され、中国人CAが誕生している。

1995年にリゾート路線を中心のJALウエイズ社が設立された。CAは、JALから出向している日本人CAがいるものの、タイ人CAを中心に機内サービスにあたっていた。その後、JALウエイズ社もJALに統合されたため、タイ人CAはJAL CAとして乗務している。

今や、JALでは、さらに国際化が進み、5、6人に1人が外国人CAとなっている

《外国人CA採用の当初目的》

外国人CA採用の目的は、時代によって変わってきている。当初は通訳要員としての役割が強かった。

1980年後半は、日本ではバブルの絶頂期だった。円が強くなり、土地も物価も高騰していた。日本人CAの給料も上がった。CAの給料をドル換算してみると、日本人CAが世界で一番高い給料となってしまった。CAの世界だけでなく、日本のサラリーマンの給料も高騰していた。

そのような中で、日本の航空会社の課題は、コスト競争力を強化する必要に迫られた。当時、シンガポール航空のCAやタイ航空のCAは、日本人CAの5分の1の給料だった。イギリスやドイツでも、日本人CAの60%程度だった。外国人CAの採用は、人件費削減に大きな目的があった。

《外国人旅客獲得》

時代が変わり、今や、訪日外国人数が1900万人(2015年)を越えた。2020年の東京オリンピックまでに、政府は4000万人まで増やしたいと考えている。外国人旅行者は、日本にお金を落としてくれる。それは、日本の国際収支の

黒字化に役立つ。

一方、出国日本人数は、年々減少傾向にある。その分、日本の航空会社は外国人旅客を増やしていく必要がある。

タイ、シンガポール、香港、台湾からの日本観光が増えている。クールジャパンの影響で、日本に来るヨーロッパの若者も少しずつ増えている。

日本人も、外国航空会社を利用したとき、日本人CAがいてくれるとなにかと便利に感じる。それと同様に、外国人旅客にとって日本人CAが乗務してくれているのは心強い。

今や、外国人CAたちは、外国人旅客を獲得する上では、欠かせない存在になっている。

《最後に》

本書では、読者になじみのある「キャビンアテンダント Cabin Attendant」もしくは「CA」の呼称を使ってきました。

実は、「キャビンアテンダント」は日本で生まれた呼称なのです。筆者が乗務を始めた1969年には、すでに社内略称として使われていました。パイロットは「Cockpit Crew」で、「C/C」の略称を使っていました。客室乗務員も、正式な英語では、「Cabin Crew」となり、「C/C」を使いたいところです。そうすると、パイロットの「C/C」と重複してしまうため、客室乗務員は、Cabin Attendantの「C/A」を使うようになりました。

ロンドン基地CAたちも、自分たちのことを「Cabin Crew」と呼んでいます。Cabin Attendantは正式な英語ではありませんので、彼女たちの会話では使いません。日本人CAたちも、自分たちのことを「Cabin」もしくは「Cabin Crew」と呼んでいます。

「キャビンアテンダント」は、1970年代以降、「アテンションプリーズ」や「 stewardess物語」などのTVドラマで使われ、メディアを通して、世間でも使われるようになりました。

「Cabin Crew」は、イギリスをはじめ旧英連邦など英語圏で使われている名称です。

戦後、航空機産業に力を入れた米国は、英語に対抗して新たな呼称を作りました。それが「Flight Attendant」(米語)です。この呼称は米語圏で使われています。

エピソード

ヨーロッパ人訓練を始めてから 20 数年の時が経ち、ロンドン基地の教え子たちは、その後、結婚して退職したり、他航空会社に移籍したり、転職したりで、長い間、音信が途絶えていました。

数年前、もしかしたら彼女たちの何人かは、フェイスブックをやっているかもしれないと、名前を検索してみました。彼女たちの名前を検索しても、同姓同名が何百と出てきます。そこで、教え子でちょっと変わった名前を検索してみることにしました。スペイン人と結婚していた“カレン・トロリス”です。めずらし名前なので、やはりヒットしたのは 2 名だけでした。もしかしたら教え子かもしれない。はやる気持ちを抑えて、彼女のページを覗いてみました。すると、友達リストに、教え子たちの名前が何人も出てきたのです。これは間違いのない。さっそく連絡を入れてみました。「How are you, Kawai-san. Long time no see you.」とメールが返ってきました。やはり教え子のカレンでした。

彼女を見つけたお陰でほとんどの教え子とフェイスブックでつながることができました。彼女たちも、同じ釜の飯を食った仲間として、今でも連絡を取り合っていたのです。同じ時期に訓練を受けていた他のクラスの人まで出てきました。そして、そのうちの二人が、2014 年に日本観光に来ました。20 数年ぶりの再会を果たしたところです。

《フェイスブックにみる文化の違い》

彼女たちと再会できたのも、フェイスブックのお陰です。そのフェイスブックに、彼女たちの近況が送られてきます。大きくなった息子や娘の卒業式や家族や友人とのパーティ写真なども送られてきます。ご主人や家族の写真も入っています。自分だけでなく家族の近況も知らせてきます。日本人の場合は、ご主人の写真などを出してくるケースはとても少ないのです。ご主人の顔が出てくるのは結婚式したときぐらいとなります。その後、写真は出てこなくなります。そして、子供が生まれると、子供の写真が多くなります。それと、料理の写真も多くなります。その料理を楽しんでいる姿を出したらどうですかと言いたくなるくらいです。

ブラジル人の教え子ともフェイスブックにつながっています。ときどきは自分が撮ったステキな風景写真を送ってくることもありますが、やはり自分もしくは家族・友人が写っている写真がほとんどです。

フェイスブックの使い方でも、異文化を感じる今日このごろです。



- 参考文献
- 「イギリス人と日本人」
ピーター・ミルワード著 講談社現代新書 1987年
- 「イギリスと日本」—その教育と経済—
森嶋通夫著 岩波新書 1987年
- 「続イギリスと日本」—その国民と社会—
森嶋通夫著 岩波新書 1988年
- 「もうひとつのイギリス史」
小池 滋著 中公新書 1993年
- 「とびきり愉快的なイギリス史」
ジョン・ファーマン著 筑摩書房 1996年
- 「豊かなイギリス人」
黒岩 徹著 中公新書 1992年
- 「イギリス・ルネッサンスの女たち」
石井美樹子著 中公新書 1997年
- 「イギリスは愉快だ」
林 望著 文春文庫 1996年
- 「イギリス王室の強き妃たち」
渡辺みどり著 講談社文庫 1997年
- 「イギリス人はおかしい」
高尾慶子著 文芸春秋 1998年
- 「イギリス人、フランス人、ドイツ人の性格」
池田徳眞著 学生社 1991年
- 「ジョンブルとマリアヌス」
倉田保雄著 文芸春秋 1980年
- 「イギリスの学校生活」
清水正昭著 サイマル出版会 1986年
- ビジネス・トラベルガイド「イギリス」
The Economist 社 1988年
- 「日本人のホス」
キャスリーン・マクロン著 草思社 1991年
- 「物語アイルランドの歴史」
波多野祐造著 中公新書 1996年
- 「とびきり哀しいスコットランド史」
フランク・レンウィック著 筑摩書房 1996年「日本の教育 ドイツの教育」
西尾幹二著 新潮選書 1988年
- 「ラインからきた妻と息子」
湯浅慎一著 中公文庫 1988年
- 「キリスト教文化の常識」
石黒マリローズ著 講談社現代新書 1994年
- 「仏教とキリスト教」
ひろさちや著 新潮選書 1995年
- 「しぐさの比較文化」ジェスチャーの日英比較
リージャー・ブロスナハン著 大修館書店 1990年
- 「ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ」
ピーター・コレット著 草思社 1997年
- 「日本人が海外に出るとき」
犬養道子著 中公文庫 1995年
- 「私のヨーロッパ」
犬養道子著 新潮選書 1974年
- 「世界比較文化事典」
マクミン・ランゲージハウス社 1999年
- 「街角のイギリス英語」
大村善勇著 丸善ライブラリー 1992年
- 「アメリカ英語とイギリス英語」
大石五雄著 丸善ライブラリー 1994年